

# 河川基金助成事業

## 「気づきからの探求と挑戦 ～梅田川から～」 報告書

助成番号：2024 - 7111 - 020

宮城県仙台市新田東すいせんこども園

園長 加藤 有希江

2024 年度

助成番号	助成事業名			施設名			
2024-7111-020	気づきからの探求と挑戦 ～梅田川から～			新田東すいせんこども園			
所在地	宮城県仙台市宮城野区新田東3丁目6番	対象河川名	七北田川・梅田川・ヒザ川・貞山堀				
対象園児	年長（12人）			活動時間	30時間		
河川教育の目標	昨年度、5歳児が川遊びする姿を近くで見ることによって「来年は自分たちも川に入りたい」という気持ちが4歳児の中で湧いてきた。進級後、身近な梅田川に入り実体験をすることで、様々なことに気づき興味が出てくると予想される。梅田川の活動から他の河川や様々な自然事象に目を向け、子どもたちの気づきに保育者が共感しながら探求心や挑戦する気持ちを育てていきたい。						
育みたい資質・能力	河川活動を通して新しい気づきや感動する体験、不思議さに出会うことで、子ども達の探求心が芽生え学びに向かう力につながっていくと考える。また、様々な生き物に触れる中で優しく関わろうとする姿につながると思う。今回は学びに向かう力（気づく・探求・挑戦）につなげていきたい。						
<b>学習活動の内容と成果</b>							
<p>身近な環境を通じて遊びながら気づきや興味を持てる活動を促すため、園の裏を流れる梅田川から取り組みを始めた。これまで身近な川でも中に入った経験がない子どもたちが、川に住む多くの生き物に気づき、新たな場所に足を運ぶことで新鮮な発見を得て、さらにその発見から湧き上がる疑問が挑戦や探求の意欲へと変化してきた。<u>友達や保育者と気づきを共有する過程で新たな疑問が生まれ、「もっと見たい」「もっと体験したい」といった好奇心や探求心が育まれてきた。</u></p> <p>子どもたちのこのような成長や気づきに寄り添うため、保育者も春に川遊びを体験する研修を実施した。<u>保育者自身が川遊びを経験することで、子どもたちと同じ目線で生き物に触れ、その観察や発見を通して援助の方法や安全管理について深く考える機会となった。</u>また、川遊びの際には保護者にも協力を依頼し、<u>協同活動として進めた。</u>これにより、<u>保護者も川遊びへの関心を持つきっかけとなり、家庭での話題として取り上げることで、休日には親子で釣りや川遊びに行くなど、川との関りが増加した。</u></p> <p>さらに、子どもの発見や気づきをクラス内で共有し、保育者と話し合いを重ね、<u>保護者を巻き込んで活動を進めることで、個々の小さな気づきがクラス全体や保育者・保護者を含む共同体全体の大きな学びへと発展した。</u>そして、皆で一つのテーマを探求し挑戦することに繋がり、より豊かな体験と関係性が生まれた。</p>							
学びの創意工夫点	普段散歩で歩いている梅田川を年間活動の入り口にし、ガサガサ体験→気づきの振り返り→新たな挑戦のサイクルを出来るだけ同じ水系に沿って繰り返し行っていくようにした。 <u>ガサガサの時には子どもの気づきを引き出せるよう取って魚の特徴や美しさに着目し会話をするようにし、活動終了時に専門家を交えて生き物や川の自然物を深堀出来るようにしてきた。</u>						
河川教育を通じて見られた子どもの変容	様々な場所で様々な生き物や人と出会い、 <u>話し合い活動を繰り返していく中で、回数を重ねるごとに子どもたち自身から「〇〇ってどうなんだろう？」「行ってみたい、やってみたい」が出てくるようになった。</u> 様々な場所、生き物、事柄に触れることで子どもたちから探求心が芽生えた。						
<b>支援者等（複数記入可）</b>							
	保護者	外部小学校	外部中学校	外部高校	外部大学	市民団体	専門家等
河川管理者	行政機関、博物館、資料館等		関係団体（漁協、農協）等		企業	その他	
支援の概要	カラババン（RAC 指導者）の支援を受けライフジャケットの装着、網の使い方、生き物の探し方を学んだ。保護者に見守りや装着の補助をしながら一緒に活動を進めた。						
<b>今後の課題・展開</b>							
<ul style="list-style-type: none"> <li>川の活動を継続的に続けていくために保育者間の共有と保護者・地域の理解が必要不可欠であると考えている。職員内での共有にとどまらず<u>保護者や地域に向けても園で行っていることを発信し協同して取り組めるようにしていきたい。</u></li> <li>一人ひとりの気づきをクラス全体で共有する話し合いを大切にしながら、子どもたちの探求と挑戦を通じて成長していけるような活動を目指したい。</li> </ul>							

・キーワードとなる言葉にアンダーラインを引いて下さい。

助成番号	助成事業名	園名
2024-7111-020	気づきからの探求と挑戦 ～梅田川から～	新田東すいせんこども園

<はじめに>

2年目の川に関する取り組みとなり、昨年川に住む生き物を見ていたり川に入った年長の姿を見たりして自分たちも川遊びをしたいというところからのスタートとなった。普段の生活の中で子どもたちの川や水に関する気づきをクラス全体の「やってみよう」「おもしろそう」に気持ちが向くよう話し合い活動を十分に取り入れながら、身近な梅田川から取り組めるようにした。また、保育者も子どもの視点に気づけるよう研修の中で「大人の川遊び」の機会を設けるようにした。又、保護者にも川遊びを知ってもらえるよう活動への参加の機会を設けるようにした。



学習活動名：河原の散歩と生き物観察 <梅田川>

日付：4月26日

1. 水中の生き物への興味を引き出す援助

普段の散歩で通り親しみをもっている身近な環境の梅田川に立ち寄り、観察かごを使用して保育者がガサガサをする様子を見たり、捕まえた川の生き物を見たりする取り組みを行った。初めは怖がる子どもや距離を置いて様子を見る子どももいたが、保育者や友達が触れている姿を見て、安心感をもち触れたり徐々に興味をもったりするようになった。友達が楽しむ姿がきっかけとなり、触れてみようという挑戦する姿や探求心の広がりが見られた。



2. 身近な川に住む生き物との出会い

活動を通して、ドジョウ、ヌマチチブ、ヌマエビなど、身近な川に様々な生き物が住んでいることを子どもたちが知る機会となった。身近な自然環境への理解を深めるだけでなく、川遊びや生き物への興味関心を高め、自分も川遊びをしてみたいという期待にも繋がった。

幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿：自然との関り・生命の尊重



**学習活動名：魚釣りごっこ**

**日付：5月15日**

### **1. 本物の釣りへの興味と想像力の発揮**

子ども達から「魚を獲るには釣りで釣るのもできるよね?」「釣りをしてみたい!」という姿が見られ、川に見立てた制作や釣竿を子ども達と作り魚釣りごっこを楽しむ。魚釣りごっこが始まると、子どもたちは友達と何匹釣れるかを競い合いながら楽しんでいた。活動中には、「本当の釣りは釣り竿に食べ物をつけるよね?何を食べるのかな」といった会話が聞かれ、子どもたちがリアルな釣りを想像しながら遊びに没頭する様子が見られた。魚釣りごっこを通じて、子どもたちは川遊びや魚釣りのイメージを膨らませながら活動に取り組み、川遊びへの期待がより高まった。

**幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿：数量・図形、文字等への関心・感覚、言葉による伝え合い、豊かな感性と表現**

学習活動名：室内で生き物とのふれあい＜梅田川の生き物＞

日付：5月28日



### 1. 外部講師（カワラバン）による生き物観察とふれあい

外部講師「カワラバン」の協力のもと、保護者も参加し梅田川に生息する生き物を観察し、ふれあう機会を設けた。子どもたちはモクズガニ、ギバチ、ヨシノボリ、コイ、ヌマチチブなどの生き物に触れ、初めは慎重だった子ども、保育者や保護者が触れた感触を伝えたり、友達が優しく触れる姿を見たりすることで、自ら勇気を出して触れることができた。

### 2. 生き物の特徴に関する発見と表現

生き物にしばらく触れた後、講師とともに振り返りを行い、魚の特徴について話し合った。子どもたちは自身で触れたり観察したりすることで、背びれやむなびれの有無に気づいたり、模様や感触を言葉で表現したりする姿が見られ、観察活動が生き物への関心を深める時間となった。

### 3. ガサガサに向けた準備

観察後には「ガサガサ」に向け、魚が生息する場所を確認し、デモンストレーションを行った。子どもたちは「石の下や草のかげに隠れてる」などの意見を挙げ、魚がいそうな場所を積極的にイメージしていた。その後、友達と協力して川の流れに対して網を立てたり、石を返したりしながら、ごっこ遊びを通じて活動がさらに盛り上がった。

### 4. 協力と主体的な学び

子どもたちが主体的に考え、友達と協力しながら触れ合ったりデモンストレーションを行ったりした。このような活動は川遊びを通じた自然環境への関心を深めるだけでなく、子どもたちの社会性や好奇心を高める場となった。

幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿：数量・図形、文字等への関心・感覚、言葉による伝え合い、豊かな感性と表現、思考力の芽生え

## 学習活動名：職員の研修<梅田川>

日 付：6月15日



### 1. 研修の目的と背景

昨年度、職員が川遊び活動に参加し、楽しさや保育教育に有効なことを職員同士で共有したことから、川への興味関心が高まった。昨年度の取り組みを受けて、職員自身がより身近な川について理解を深め、子どもたちの活動に活かせる方法を探るため研修を行った。

### 2. 川を上流から下流まで歩く体験

研修では、職員が梅田川を上流から下流まで500メートルほど歩きながら、自然環境の変化や特徴を観察した。数百メートルの間でも石の大きさや地形の変化を感じられた。この活動を通じて滑りやすい場所や石の大きさの違い、生き物が生息している場所などに気づく機会となった。



### 3. 子どもたちの活動への活用

研修で得た気づきにより、職員は子どもたちの活動に取り入れられる要素を増やすことができた。例えば、滑りやすい場所への注意喚起や、生き物が好む環境についての話題を取り入れることで、より具体的で実践的な援助のヒントとなった。また、子ども達の目線になり感じたり楽しんだりする中で、子ども達の発見や気づき、思いに共感できるきっかけにも繋がった。

### 4. 安全意識の向上

川を実際に歩くことで、安全への意識も高まった。滑りやすい場所や川底の状態など、現場での体験を通じて安全管理に対する理解が深まり、子どもたちの川活動をより安全にサポートする体制が整った。

学習活動名：梅田川中流域での川遊び<梅田川>

日付：6月27日



### 1. 初めて川に入る子どもたちの反応

川に入るのが初めての子どもたちの中には、靴や靴下が濡れることに対して躊躇する子もいた。しかし、保護者が一緒にいることや友達が楽しそうに遊んでいる様子を見て、徐々に安心感を持ち、自ら川に入ることができた。このような保護者や友達の存在は、子どもたちの挑戦を後押しするきっかけとなった。

### 2. 川遊びを通じた学びの広がり

実際に川に入ることで、子どもたちは自然と触れ合いながら、川に入る感覚や生き物を探す楽しさ、発見した喜びを感じることができた。カニやウナギ、エビ、ヌマチチブ等の特徴や雄雌の区別等、興味を持つ中でより知りたいという思いが芽生えた。初めは恐る恐るだった子どもも、実際に水に触れることで安心し、川遊びを楽しむ姿が見られるようになった。このような経験は、子どもたちにとって、川の流れや自然の仕組みについて興味をもち、興味関心を広げたりたくさんの魚を捕まえるために違う場所で川遊びをしてみたいという探究心や期待の高まりに繋がった。



幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿：協同性、言葉による伝え合い、思考力の芽生え、自然との関わり・生命尊重、豊かな感性と表現

学習活動名：飼育している魚<モツゴじゃなくてタモロコ？>

日付：7月22日

### 1. 図鑑を通しての気づき

田んぼの用水路からとってきた魚を飼育しており、名前が分からないまま飼育を続けてきた。川に関する活動が進む中で、図鑑を見ながら見比べたり考えたりする時間が増えていくと、その過程で飼育している魚の「顔や体の線が同じ」であることに気づき、タモロコに似ていることを発見した。さらに、口元のひげなど細かな部分にも着目する姿が見られ、観察力や探求心の成長を感じる場面があった。

### 2. 餌やりに対する主体的な取り組み

子どもたちは自分たちの食事と重ねながら、「お魚さんもお腹が空いていると思うからご飯をあげよう」と考え、餌の食べ残しを確認しながら給餌を行うようになった。毎日様子を気にかけて、「お家汚れてきちゃったから掃除してあげたい」「掃除したら綺麗になって気持ちいい、ありがとうって言うてるね」等、魚の思いを考え共に過ごす仲間として大切に世話をする姿が見られるようになっていった。

### 3. 興味の広がりとは他クラスへ

観察や餌やりの様子を他クラスの子どもたちが見て、興味を持ち始める姿も見られた。他クラスの子どもたちは真似をしたり、その様子を観察したりしながら、生き物への関心を広げていった。このように、一人ひとりの気づきが周囲に伝播し、活動全体として広がりを見せる様子が印象的だった。

**幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿：**言葉による伝え合い、協同性、道徳性・規範意識の芽生え、思考力の芽生え、自然との関わり・生命尊重、豊かな感性と表現



## 学習活動名：七北田川河口での川遊び <蒲生干潟>

日付：7月23日



### 1. 川の終わりを求めて

子どもたちは川の取り組みや話し合いをしていく中で、川が一方に流れることに気づき、その流れの終着点である河口に行ってみることにした。蒲生干潟に到着し、堤防を登ると広がる海の景色に「うわー、きれい！」と歓声を上げ、自然の美しさに感動する姿が見られた。川遊びを中心とした活動と考えていたが、子どもたちの視野は広く、景色に目を向ける意識を持っていることや感受性の豊かさに驚いた。



### 2. 自然事象への気づき

活動中、穏やかな風が吹いていた際に、一人の子どもが風向きの変化によって「匂いが変わった」と潮風の匂いを感じ取っていた。また、干潟を歩きながら川と海の水が混ざる場所に触れたり入って歩いたりする中で、水温の違いに気づく子どももあり、体験を通じて自然事象の変化に気づいていた。



### 3. 生き物への興味と観察力の深まり

梅田川での活動や生き物とのふれあいを通じて、魚の模様の違いを比較する観察力が養われていた。河口で出会ったボラ、ワタリガニ、ヒメハゼ、マハゼ、シモフリシマハゼ、クサフグといった生き物に注目し、梅田川にいた生き物と比べ形が似ているものがあったり、同じハゼでも数種類いたりすることに気づくなど観察力の高まりを感じた。

### 4. ライフジャケットへの慣れと協力する姿

川遊びを重ねてきたことで、子どもたちはライフジャケットを装着することに慣れ、友達に着せる手伝いをしようとする協力的な姿が見られるようになった。安全意識の向上だけでなく、他者との関わりや助け合いの気持ちが育まれていると感じた。

**幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿：**言葉による伝え合い、健康な心と体、自立心、協同性、道徳性・規範意識の芽生え、思考力の芽生え、自然との関わり・生命尊重、言葉による伝え合い、豊かな感性と表現

学習活動名：蒲生干潟の振り返り

日付：7月24日

### 1. 写真を見ながらの振り返り活動

蒲生干潟での活動を振り返る時間を設け、写真を見ながら子どもたちと話をした。写真を使用し振り返りを行うことで鮮明に思い出すことが出来、子どもたちは「景色がきれいだった」「カニがたくさん捕れた」など、印象的な体験を思い出し、楽しそうに話をしていた。特に、梅田川が海につながっていることを知ったことで、新たな関心が芽生える姿が見られた。

### 2. 挑戦心や探求心の高まり

振り返りの中で「もっと川をたどってみたい」「ガサガサだけでなく釣りもしてみたい」といった意見が出てきた。活動を通じて新たな疑問が湧き、子どもたちの挑戦心や探求心が一層高まっていることが感じられた。

### 3. 友達の前で話す力の成長

振り返りでは、子どもたち一人ひとりが自分の体験や今後してみたいことを友達の前で話す機会を設けた。進級当初は恥ずかしがっていた子どもたちも、川遊びの中で、それぞれに興味のあるガサガサや観察、触れる体験を通じて自分がやってみたいことに挑戦しその子なりのペースで進めてきたため、発表の時には自分の体験を話すことができ、自分の言葉で思い出を伝えようとする姿が見られるようになった。

**幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿:** 健康な心と体、自立心、協同性、道徳性・規範意識の芽生え、社会生活との関わり、思考力の芽生え、自然との関わり・生命尊重、言葉による伝え合い、豊かな感性と表現

## 学習活動名：七北田川上流に向けての話し合い

日付：7月31日

### 1. 上流への取り組みについて

川を辿ってみたいという子どもたちのリクエストを受けて、上流に行く活動を計画した。候補地として、難易度の低い小川のような場所と、山深い岩場のある川を提案し、子どもたちと写真を見ながら話し合いを行った。

### 2. 子どもたちの選択

話し合いの中で、子どもたちは山深い岩がごろごろした場所を選んだ。今までの川遊びの経験から、水が落ち込む部分に魚がいそうだと想像したり自然の豊かさを感じ生き物がたくさんいそうということが理由として挙げられた。子どもたち自身で考え、想像しながら決定に至った姿は、今までの活動を通じて探求心や観察力が養われてきている成果だと感じた。

### 3. 次なる川遊びへの期待

山深い川を選んだ子どもたちは、これまでの川活動で得た経験を活かして、どのような生き物がいるのか、どのような景色が広がっているのかなどわくわくする様子が見られた。川の活動を連続的に行うことで深く考えられるようになり新たな期待が生まれていくのだと感じた。

**幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿：**自立心、協同性、道徳性・規範意識の芽生え、思考力の芽生え、自然との関わり・生命尊重、言葉による伝え合い、豊かな感性と表現



## 学習活動名：七北田川上流での川遊び<ヒザ川>

日付：8月28日



### 1. 中流、下流との景色の違い

山に向かう途中、子どもたちはバスの窓から田んぼや畑に目を向け、自分たちの住んでいる町の風景との違いを比べながら景色を楽しむ姿が見られた。バス到着後は暗い森や原っぱを歩きながらトトロの森を探検するような感覚で、胸を躍らせながら川遊びポイントに向かった。



### 2. 新たな生き物との出会いと道具を使うことで見えるもの

現地ではイワナやオニヤンマのヤゴ、ハリガネムシなどを発見。同じ場所から見つけたヤゴも種類が異なることに気づき、似たような生き物でも様々な種類がいることに気づいた。また、箱眼鏡を使って、肉眼では見えにくいものを道具を使うことによってきれいに見える楽しさを感じながら、水の中を観察していた。



### 3. 川の歩き方の上達と考える力

これまでの川遊びの経験から、子どもたちは川の中を歩くことにも慣れてきた。ごつごつした岩場でも足の置き場所を慎重に考えながら歩いたり、自分の身のこなしがわかり行ける場所と行けない場所を考えながら、歩きやすい場所を選んだり回り道をしたりして沢を登る姿が見られた。



### 4. 生き物探しの技術と思考力

ガサガサでの生き物探しを通じて、子どもたちは水の落ち込みに網を置いたり、よどみのある場所で石を返したりするなど、生き物がいそうな場所を予測する力を身につけていた。また、網で追い込む方法を知り、水の流れを考えながら工夫して活動する姿も見られた。

### 5. 図鑑との結びつきと知識の深化

虫好きな子がハリガネムシのことを既に図鑑で知っており、現地で実物を見てその特徴を確認することができた。園での本・図鑑を見る活動が、体験と知識を結びつける機会となった。

**幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿:**健康な心と体、自立心、協同性、道徳性・規範意識の芽生え、社会生活との関わり、思考力の芽生え、自然との関わり・生命尊重、数量・図形、文字等への関心・感覚、言葉による伝え合い、豊かな感性と表現

## 学習活動名：七北田川上流ヒザ川の振り返り

日付：8月28日

### 1. 写真と地図を活用した振り返り

ヒザ川で遊んだことを振り返るために、写真とグーグルマップを使用し、ヒザ川から七北田川、梅田川、蒲生干潟までをたどる活動を行った。地図を使って確認することで、子どもたちは山から海へと水が流れていくことを視覚的に知ることができ、川の流れの全体像をつかむ機会となった。

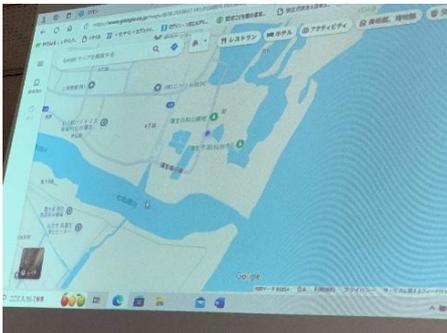
### 2. 釣りへの強い挑戦心

春の釣りごっこや上流から下流までのガサガサを通じて生き物探しをしてきた子どもたちからは、釣りへの挑戦を強く希望する声が聞かれた。保育者とカワラバンで相談し比較的難易度が低いハゼ釣りを提案した。活動の舞台として、貞山掘りにハゼがいることを伝えると、子どもたちは地図を確認しながら貞山掘りは「川なの?」「海なの?」と疑問を抱く姿が見られた。

### 3. 貞山掘りに関する新たな発見

子ども達の疑問から保育者がインターネットで調べてみると貞山掘りが海でも川でもなく、人が人工的に掘ったものであること、日本一長い堀であることを知った。子どもたちは驚きの表情を見せ、さらに地図を使って他にも同じような場所があるのかを探し始めるなど、探求心が高まる様子が見られた。

**幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿:**健康な心と体、自立心、協同性、道徳性・規範意識の芽生え、社会生活との関わり、思考力の芽生え、自然との関わり・生命尊重、数量・図形、文字等への関心・感覚、言葉による伝え合い、豊かな感性と表現



## 学習活動名：貞山掘りでのハゼ釣り

日付：10月2日

### 1. 釣りたい気持ちからの挑戦

ハゼ釣りではのべ竿と生きた餌であるイソメを使用した。初めてイソメを針に付けることに抵抗を示す子どももいたが、魚を釣りたいという気持ちが勝り、徐々にイソメをつけることに挑戦する姿が見られた。ドキドキしながらも挑戦し乗り越える経験が、子どもたちの自信や意欲を育むきっかけとなったのではないかと思う。

### 2. ハゼ釣り

はじめはねらったポイントに針を落とすことが難しかったり根がかりしたりする姿があったが粘り強く取り組み、十数分経つとちらほら周りから釣れた歓声があがっていた。1時間ほどで全員が魚を釣り上げることができた。成功体験を得ることで、釣りへの喜びや達成感を共有する場となった。

### 3. 命について考える機会

釣った魚を針から外す際に弱ってしまう魚を見て、「逃がしてあげた方がいい？」と考える子どもがいた。講師のカワラバンが、逃がしても弱って死んでしまう可能性があることを伝え、釣った魚をおいしく食べることが命への感謝につながることを知らせた。大人からすると難しいように感じる話ではあったが、命に向き合う中で、身近な食事の話に置き換えることで子どもは納得することができた。

### 4. 数と大きさ比べ

釣り活動後には、友達と一緒に釣った魚の数を数えたり、大きさを比べた。「26匹釣れたからめろん組みんなで食べれるね！」とクラスの在籍人数と比較し喜んだり、大きさを比べながら自分が釣った喜びを共有していた。

**幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿:**健康な心と体、自立心、協同性、道徳性・規範意識の芽生え、思考力の芽生え、自然との関わり・生命尊重、数量・図形、文字等への関心・感覚、言葉による伝え合い、豊かな感性と表現



## 学習活動名：ハゼ釣の調理

日付：10月4日

### 1. 挑戦する気持ちを育む調理体験

釣ったハゼを自分たちで調理する体験を実施した。初めは死んだ魚に触れることへの抵抗を感じる子もいることを想定し、「やってみよう」と思う子どもたちを募り活動をスタートした。興味・意欲のある子どもたちから始めることで、活動をためらっていた子どもたちも少しずつ「やってみよう」という気持ちを抱くようになり、最終的には全員が挑戦することができた。

### 2. 命の大切さに気付くきっかけ

魚を調理する体験に対して、興味をもち積極的に取り組む子と「気持ち悪い」と言う子の姿があった。その際、講師から「大切に調理して美味しく食べることが魚の命を大切にすること」と教えてもらい、子ども達も一匹一匹を大切に捌き調理しようとする姿へと変化していった。命の大切さ、命をいただいて自分が大きく成長できていること、食材を用意してくれたり調理をしてくれたりする人の存在に気付き、感謝の気持ちをもち食事を残さず美味しく食べようとする心の中にも繋がった。

### 3. 家庭での活動への広がり

ハゼ釣りからクッキングまでのエピソードを保護者に知らせることで、園にライフジャケットや釣り具を借りに来て、週末に親子で釣りに行きその魚と一緒に食べるという家庭での新しい楽しみへとつながる姿も見られた。

**幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿：**健康な心と体、自立心、協同性、道徳性・規範意識の芽生え、社会生活との関わり、思考力の芽生え、自然との関わり・生命尊重、数量・図形、文字等への関心・感覚、言葉による伝え合い、豊かな感性と表現



## <まとめ>

### 1. 継続的な興味を引き出す取り組み

普段の活動の中で子どもたちが抱いた興味や疑問を出発点に、「話し合い」「実践」「振り返り」のサイクルを繰り返すことで、子どもたちは「やってみたい」「おもしろそう」といった探求心を継続的に持つことができた。このアプローチにより、子どもたち自らが主体的に川遊び活動を楽しむ姿が見られた。

### 2. 保育者と子どもの協働

保育者が子どもたちと共に考え、同じ方向を向いて活動を進めることで、双方の信頼関係が深まった。一緒に進めることで子どもたちの気づきや発見を支える土台となり、活動の質を向上させることが出来たのではないかと考える。

### 3. 職員同士の学びと共有

職員研修の実施を通じて、職員は子どもと同じ目線に立つ重要性を再認識した。生き物や自然物に触れる楽しさを職員同士で共有する機会を設けることで、保育の実践においてねらいが共有され、川遊び活動への理解が深まった。

### 4. 保護者の参加による相乗効果

保護者の協力を得ることで、活動の幅が広がり、親子で川遊びの楽しさやワクワク感を共有することができた。また、安全な遊び方を保護者とともに学ぶ機会を設けたことで、家庭での川遊びや釣りにもつながったのではないかと考える。

## 最後に

子どもたちの気づきが、話し合いを通して他の子どもたちにも広がり、探求や挑戦への意欲をクラス全体で育てていくことができた。この「気づきの共有」を繰り返すことにより、探求と挑戦が生まれ、幼児期の終わりまでに育ててほしい「10の姿」にもつながる深い学びが得られたと感じる。今後も、一人ひとりの気づきをクラス全体で共有することを大切にしながら、子どもたちが探求と挑戦を通じて成長していけるような活動を目指していきたい。

助成番号	助成事業名	学校名
2024-7111-020	気づきからの探求と挑戦 ～梅田川から～	新田東すいせんこども園

主な実施箇所 七北田川水系 ヒザ川 梅田川 蒲生干潟

※環境学習を数カ所で行っている場合は、代表的な箇所を2カ所程度記載してください。  
 ※ダム等の施設を見学した場合は、当該施設の位置図を記入して下さい。  
 (縮尺は 1/50 万～1/100 万程度)

助成事業の主な実施箇所

